

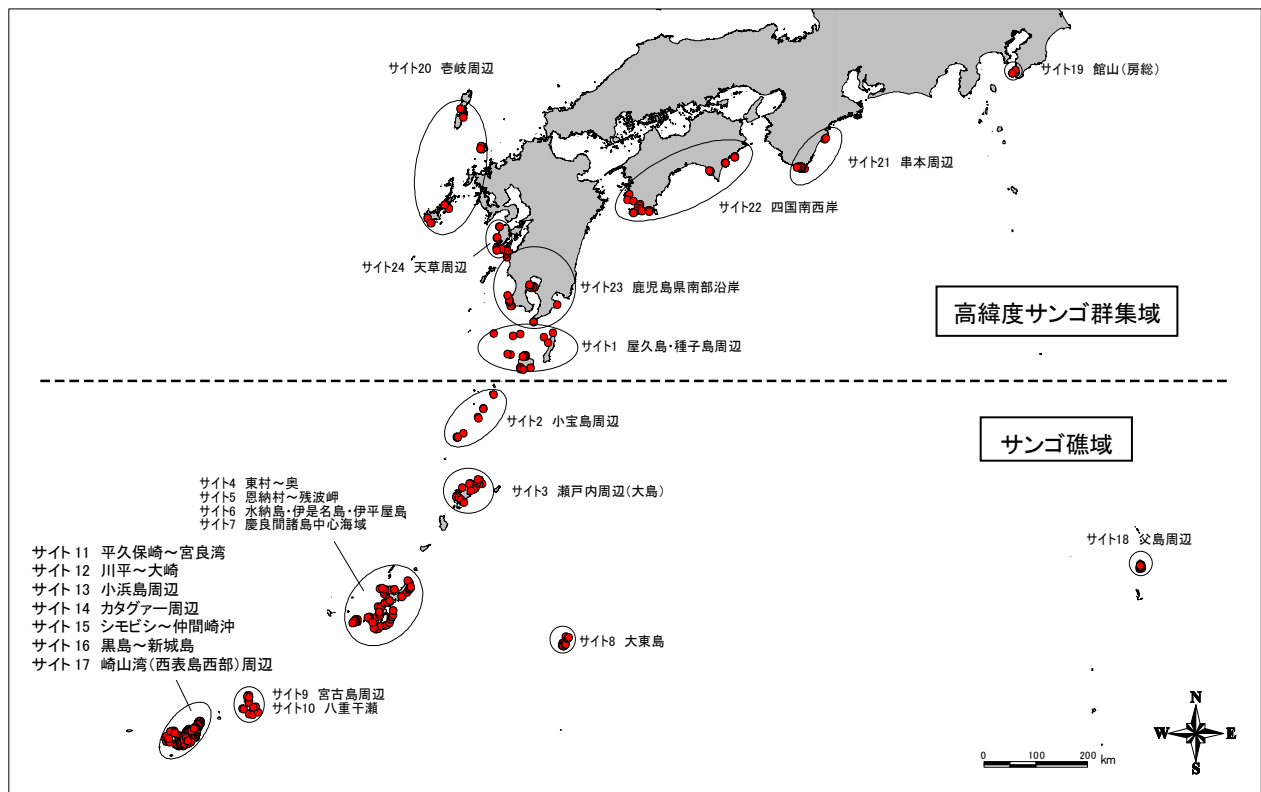
モニタリングサイト 1000 サンゴ礁調査

平成 22(2010)年度速報

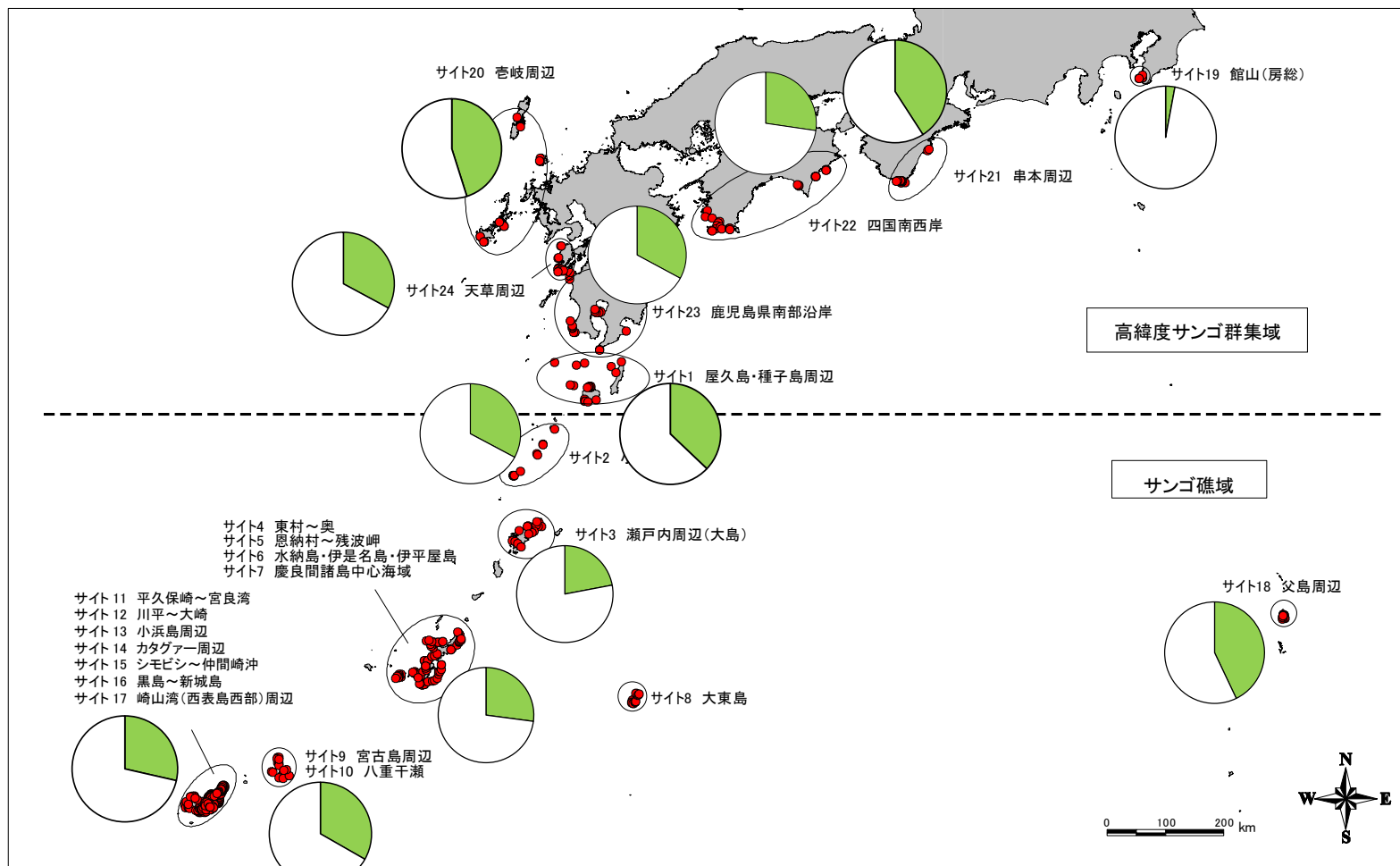
●はじめに

モニタリングサイト 1000 サンゴ礁調査では、サンゴ礁の発達するサンゴ礁域とサンゴ群集が生育する高緯度サンゴ群集域に合計 24 サイトを設置し、毎年モニタリングを行っています（トカラ列島と大東島の 2 サイトは、遠隔地にあるため 5 年に 1 度実施します）。

ここでは、2010 年度に行ったモニタリング結果の概要をお知らせします。



モニタリングサイト 1000 サンゴ礁調査サイト位置図



モニタリングサイト 1000 サンゴ調査における平成 22 (2010) 年度の各サイト又は海域の平均サンゴ被度 (%)
 円グラフは平成 22 年度 (2010) 年度の平均サンゴ被度を示す。

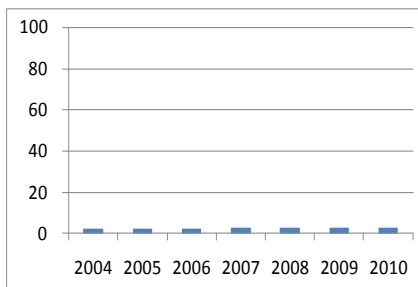
各サイト及び海域の概況

高緯度サンゴ群集域

モニタリングサイト 1000（サンゴ礁調査）では、サンゴ礁を形成しない温帯域のサンゴ群集分布域のことを「高緯度サンゴ群集域」と呼び、屋久島とトカラ列島の間を境界にして、館山（サイト 19）から屋久島・種子島周辺（サイト 1）までのサイトを含みます。

館山(サイト 19) 調査代表者:お茶の水女子大学・清本正人

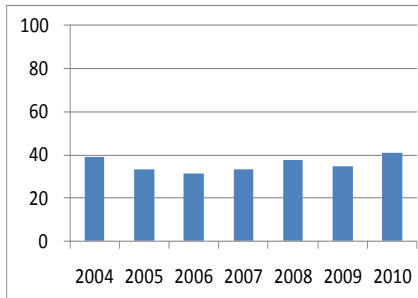
全地点の平均サンゴ被度は 2.9%と低いですが、昨年同様の状態が維持されている。イセカセンによる食害は収まりつつあるが、カイメンや海藻で覆われている地点も見られた



カイメンと海藻に覆われたベルベットサンゴ

串本周辺(サイト 21) 調査代表者:串本海中公園センター・野村恵一

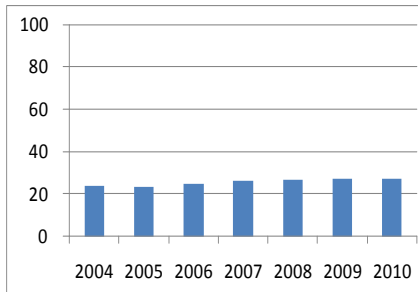
地点 9 のクシハダミドリイシや地点 18 のキッカサンゴ群集の急速な回復により、平均サンゴ被度は昨年より 2.7 ポイント増加した (37.9%)。



地点 13 のクシハダミドリイシ群集

四国南西岸(サイト 22) 調査代表者:黒潮生物研究所・岩瀬文人

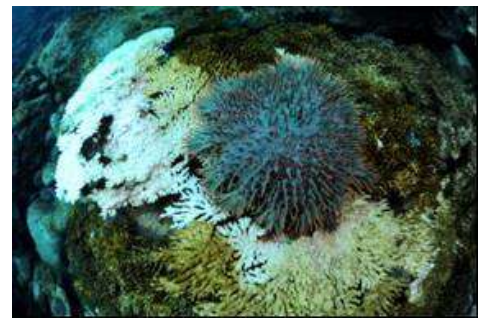
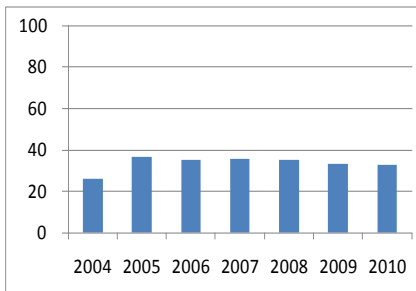
ほとんどの地点で変化はなかったが、黒崎ではオニヒトデの大発生が続き、サンゴ被度が 5%未満に低下した。竹ヶ島ではこれまで見られなかったサンゴ食巻貝が確認され、今後の被害が懸念された。



黒崎のオニヒトデ

鹿児島県南部沿岸(サイト 23) 調査代表者:ダイビングサービス海案内・出羽慎一

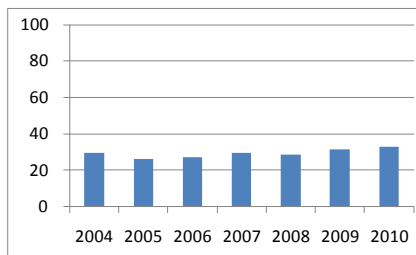
平均サンゴ被度は昨年より若干減少した。夏季高水温による白化現象が見られたが、へい死はほとんどなかった。オニヒトデは南薩、坊ノ岬周辺で大発生し、身代湾周辺では桜島の降灰被害が見られた。



オニヒトデによる食害(赤水)

天草周辺(サイト 24) 調査代表者:九州大学・野島哲

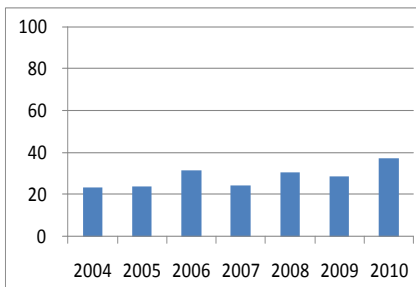
台風や高水温による白化現象などは無かったが、冬季季節風による時化のため、一部でサンゴが転倒した。桑島、大島港西、片島ではオニヒトデの食害が見られた。



大島北で採集されたオニヒトデ

屋久島・種子島周辺(サイト 1) 調査代表者:屋久島海洋生物研究会・松本毅

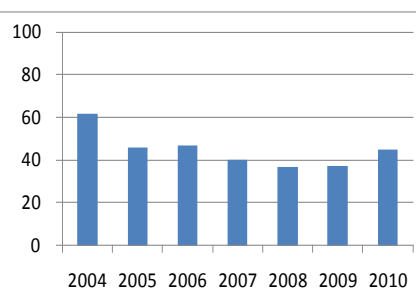
平均サンゴ被度は昨年から増加して 37.1%であった。竹島では新規加入が多く、中間ではクシハダミドリイシの成長が著しかったが、馬毛島のスギノキミドリイシはほぼ全滅した。



スギノキミドリイシのガレ場(馬毛島)

壱岐周辺(サイト 20) 調査代表者:国立環境研究所・杉原薫

対馬太田浦以外はどこも昨年と同程度もしくは増加傾向を示し、平均サンゴ被度も増加して 45.1%であった。太田浦の被度減少は病気による死亡のためと思われた。



放射個体が白くなったサンゴ(太田浦)

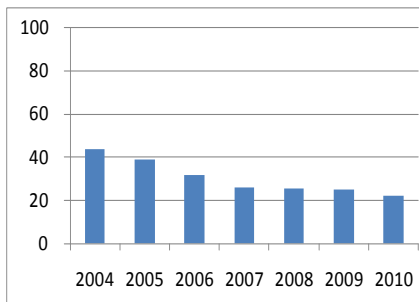
サンゴ礁域

サンゴ礁域とは、サンゴ礁を形成する亜熱帯域を指し、モニタリングサイト 1000 サンゴ礁調査では、小宝島周辺（サイト 2）以南の石西礁湖及び西表島周辺海域（サイト 17）及び小笠原諸島・父島周辺（サイト 18）までを含みます。

なお、大東島（サイト 8）は 5 年に 1 度モニタリングを行う遠隔地サイトであるため、2010 年度は調査を実施していません。

瀬戸内周辺(サイト 3) 調査代表者: ティダ企画有限会社・興克樹

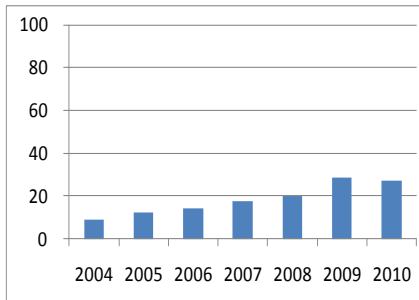
平均サンゴ被度は昨年から減少して 22.0%であった。2010 年 10 月に集中豪雨による土砂流出のため、久場では水深 4m 以浅のサンゴ群集がほぼ全滅した。デリキョンマ岬では病気の被害が減少した。



土砂のため死亡した久場のコブハマサンゴ

沖縄島及び周辺離島(サイト 4~6) 調査代表者: 沖縄県環境科学センター・長田智史

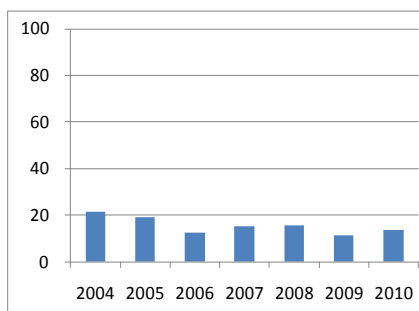
東岸では被度が増加傾向にあったが、西岸では被度の増加が鈍化あるいはわずかに減少する傾向があった。周辺離島のサンゴ被度は昨年から増加傾向か同程度であった。



回復傾向が見られた東岸（久高島）

慶良間諸島中心海域(サイト 7) 調査代表者: 阿嘉島臨海研究所・岩尾研二

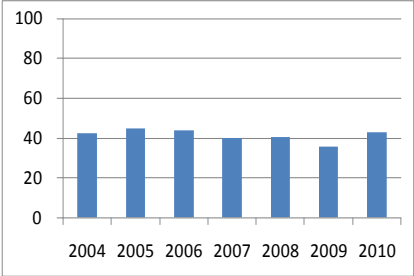
平均サンゴ被度は昨年からわずかに増加して 13.8%であり、徐々に回復していると思われた。しかし、多くの地点でサンゴ食巻貝が見られ、また原因不明の死亡も散見された。



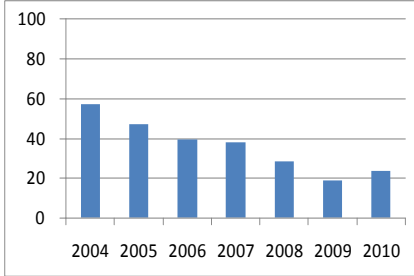
クシバルで見られたサンゴ食巻貝

宮古島周辺及び離礁(サイト 9、10) 調査代表者: 宮古島市役所・梶原健次

宮古島周辺では被度の低下が明瞭な地点は無く、オニヒトデ被害から回復傾向にあると思われた。八重干瀬でもほぼ昨年と同様の状態であった。



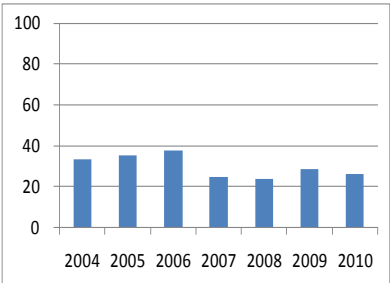
宮古島周辺



八重干瀬

石垣島周辺(サイト 11、12) 調査代表者: (有)海游・吉田稔

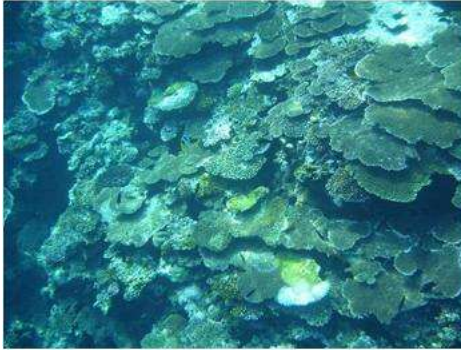
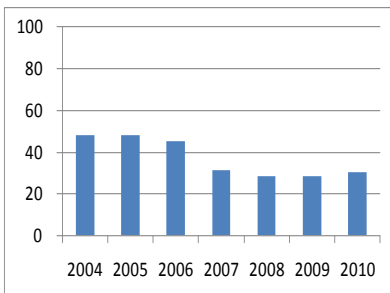
平均サンゴ被度は 26.3%であり、昨年からわずかに減少した。原因はオニヒトデによる食害と 10 月の集中豪雨による土砂の流出、台風による被害であった。



St.77 で観察されたオニヒトデ

石西礁湖及び西表島周辺海域(サイト 13~17) 調査代表者: 自然環境研究センター・木村匡

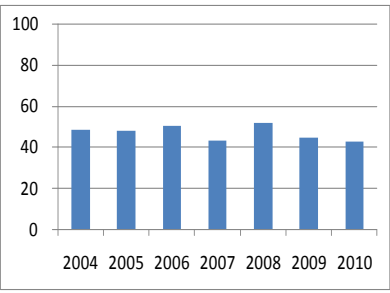
平均サンゴ被度は昨年度からわずかに増加して 30%。2007 年の大規模白化現象から回復傾向にあると思われた。オニヒトデは大発生レベルが 5 地点、順大発生レベルが 16 地点であった。



St.114 のオニヒトデの食痕

父島周辺(サイト 18) 調査代表者: 小笠原自然文化研究所・佐々木哲朗

昨年の白化現象の後に斃死した影響か、平均被度がわずかに減少し 42.9%であった。今年度は白化が見られなかったが、1 地点を除く全ての地点で骨格異常などの病気の群体が観察された。



父島釣浜で見られた骨格異常